

俳句雑誌



空

令和4年2月25日発行

第19巻6号

通巻第100号



2022・1・2

SORA 100号

粕屋 吉田 葎

百年の床のきしみや福沸
まづ背筋真直ぐ立つる筆始
春著着て鹿の一礼受けてをり
日脚伸ぶ総身ひかる撫で仏
夜咄の帰り尻尾の生えて来し

須恵 苑 実耶

露けしや階下に母の覚むる音
薬膳の仕上げに枸杞の実を三粒
をさな児は泣いて勝ちたり牛膝
秋高し釣果に包丁研ぎにけり
天寿まで生きよと山へ猪放つ

糸田 宮井 知英

海に向く洞の真闇や鷹渡る
連日の人に倦みたる菊人形
病室に綾取りの川流しけり
猫抱いて霜焼の手を労りぬ
寒紅や鬨志失せたる唇に

千葉 原 友子

平飼ひの鶏に愛称草の花
穴熊に踏まれてしまふ大根の芽
土寄せやおんぶばつたを遊ばせて
外されて腰抜けとなる秋簾
気に入らぬ切手を使ふ残暑かな

北九州 坂口 学

磯着脱ぐ海女は乳房を隠さずに
鉛にからむ蛸を空へと突き上ぐる
布袋腹にそろそろ慣れて夕端居
長老が大魚を捌く秋祭
秋うらら沢を渡るに石置いて

福岡 あさなが捷

冬の月神話の女容赦なし
極月や羽むしられし鶏の貌
地鶏さげ市場抜け出す年の暮
ほろよひ機嫌で煤逃げの父戻る
絹手套ぬぎて男を追ひつむる

太宰府 山本 則男

人を恋ふ色にはあらず曼殊沙華
鳥渡る音のととのふ巫女の鈴
大空の色定まりし渡り鳥
こなからの酒で足りたる雁のこゑ
啄木鳥の叩けば森の古びゆく

福岡 秋津 令

争ひし羽根を水辺に鳥帰る
蟻五匹人差し指で殺めけり
ご近所も道に出てゐる遠花火
囃されて逸れてしまひし西瓜割
灘風にのけぞつてゆく案山子かな

北九州 河原敬子

まだ暗き土間に蚊遣火焚きにけり
きのふとは違ふ失敗して溽暑
沼に脚とられ水番亡くならる
恐竜の足跡あらは早川
新涼や会ひたき友へまづ文を

兵庫 大西乃子

新涼やサラブレッドの脚細し
水牛のやうに大きな茄子の牛
民宿のおしろい花に迎へらる
秋めくやどかと積まるる新刊書
清張の罨にかかりし夜長かな

福岡 永淵恵子

うかつにも踊り上手の輪に入りぬ
開かんとふるふるふるへ月見草
新走り一つ話の武勇伝
伸びきつて芋虫気配消してをり
芋虫の縮む力を厭ひけり

長崎 松尾龍之介

分校の木目あまねし蟬時雨
あめんぼう水凹まして水の上
槌・砧・あぶみを伝ひ古風鈴
夕焼や外野の居らぬ草野球
目薬のあとの瞬き涼新た

福岡 栗原京子

箱入りの鳩を静めて放生会
放生会魚を放つに笛奏で
からだちゆう管理されたる生身魂
生身魂泣いてゐしわけすぐ忘れ
冬銀河嘆きをすべて歌として

大野城 森田明成

大雨に沈む列島秋に入る
口を衝くモールス符号敗戦忌
顔馴染み減りゆくばかり秋の風
廃線は道となりけり猫じやらし
古釜のしづかに新米炊き上ぐる

直方 石橋幾代

大皿のいくつも並ぶ盃蘭盆会
祭果つ浜にしばらく火の匂ひ
秋遍路だんだんに道細くなる
児も太鼓叩いてゐたる虫送り
大根干す玄界灘の正面に

直方 曾根富久恵

神事みな男ばかりや夏祓
おやまあと木魚忘れし盆の僧
妹は妣の服着て秋彼岸
秋晴や出窓に並ぶガラス瓶
秋風や社に大きすぎる絵馬

福岡 三井所美智子

玻璃ごしの雲の速さや今朝の秋
物言へば説教となる生身魂
海底のトンネル歩く九月かな
秋めくや鳥獣戯画の本尊も
残る蚊や水城の端に墓三基

広島 星加鷹彦

灯台の白の濃くなる夏の朝
父の日や田畑五反売りに出す
誰も居ぬ二階のきしむ夜長かな
一郷の水の繋がり青田風
見えさうで見えぬ余生や星月夜

兵庫 えとう樹里

日焼けして夫に似てくる赤ん坊
畦道を一行に行く捕虫網
巡礼の鈴につきゆく花野かな
秋高しパズルのやうに家が建ち
むくげ咲く餌場の多き猫通り

神奈川 窪みち子

田の縁に白鷺群るる盆休み
新しき卒塔婆の匂ふ秋夕べ
十二打つからくり時計秋の風
迎火を焚く母に傘さしかくる
すいつちよの跳ぬる空地の広々と

大阪 田岡千章

桔梗のむらさき人に触れさせぬ
手馴れたる料理ぞ己が敬老日
蒸し返す話は聴かぬ秋扇
研ぎ減りて馴染む包丁梨を剥く
無花果は甘し青春は苦し

北九州 兒玉充代

海わたり来て秋風となりにけり
ペダル漕ぐ少年ふたり鱗雲
犬追つて土手を駆くる子秋の風
秋の蜂怒る翅音と思ひけり
意に添はぬ場所に運ばれ草の絮

兵庫 林徹也

秋蝶の通り抜けたる楠の穴
回廊の柱膨らむ菊日和
石路咲くや百年開かぬ御成門
流木を荒縄で曳く冬支度
ささくれし鈴の緒を振る秋夕べ

岡垣 田中とし江

榎榎の実落つれば犬の起きあがる
秋風や猫食み残す雑魚の貌
さつまあげ袋に熱し秋遍路
水平線干し鮫風に片寄れり
アトリエまで登つてゆけば秋の風

熊本 松田明子

松手入塀の外にも枝落とし
篝火の燃え立ち鵜舟現はるる
灯を点し火の海となる踊りかな
顔を笠に埋めて踊りきる
下駄の齒の音をひとつに阿波踊り

北海道 押田裕見子

まだ動く二人暮しの冷蔵庫
夜の秋文字の大きな童話読む
母と来し妣のふるさと稲の花
投手より日焼してゐる補欠の子
豊年や鎮守の森の水柱

兵庫 岩井京子

太陽も地球も発熱暑きこと
雷鳴を気にせぬ素振り子の前では
夕立に追はれ取りこむ洗濯物
褪せさうになき夾竹桃の紅さ
萩の花立ち話つい長くなり

兵庫 岡村尚子

濃紺にしづもる海や寒波来る
冬りんご誰とも会はず一日過ぐ
自転車で行つたり来たり冬菜畑
一仕事終へたる父の亥の子唄
ひとひらの雲をとどめて山眠る

兵庫 青木朋子

海近き町へと冷房列車かな
海に足浸して夏の一人旅
をさな児は跳ぬるのが好き夏の雲
水遊び母のお尻の泥だらけ
子を挟み夫婦本気の水鉄砲

北九州 横田敬子

使はれぬまま古びゆく蠅叩き
校庭に増築の棟赤のまま
神苑の葉擦れの音や秋気澄む
産土の大木を伐る残暑かな
丁寧に捏ぬる白玉秋彼岸

直方 吉田悦子

恋語る少女の睫毛花みづき
泣く母の背をさする子や柚子の花
もの忘れ防止指南書欲しき夏
病みあがりの夫が子を待ち水を打つ
髪洗ふ何もなかつたことにして

東京 山田正子

鱚雲渚は日々に新しき
主なき部屋にたつぷり秋夕日
杉の里一途に曲る唐辛子
一日を月下美人に使ひをり
木洩れ日と揺れてゐるなり秋の蝶

長崎 仲里奈央

炎昼や大人にもある反抗期
笑顔ばかり残してゆきし百合の花
二重虹夕餉すつかり冷え切つて
五枚目の便筆に入る夜長かな
佳き言葉のみ吸ひ込める秋の朝

東京 今井康子

能登瓦光る町並み鳥渡る
振り向けば立山連峰稲架の列
手上ぐればバス止まる村柿貰ふ
木犀の香や犀屋と鏡花の像
新米のおにぎり大機能登茶店

空集

柴田佐知子選



極めたる白磁の薄さ秋気澄む

福岡 高倉和子

表札の跡の白さや鯛雲

芒原吹かれて道の現るる

厨房のきしむ踏台秋土用

後悔に非ず無花果食べてをり

この先は乾ぶ他なし唐辛子

鍍絵描く梯子の上を鳥渡る

大滝を去り尋常な世に戻る

直方 石橋幾代

海風の荒んできたる秋遍路

鈴一つ転がつてゐる祭あと

身の内の澱ごと夕立去りにけり

その果てに死神の待つ大花野

刈伏の藁踏む蟋蟀が跳ぬる

水底も空の明るさ秋の蟬

広島 戸栗末廣

一本の電柱の影原爆忌

校庭の真中に踊りやぐらかな

水平線まぢかに秋の更衣

ころげ出て貌ほのぼのと栗の虫

逢ひに行く胸にふはふは赤い羽根